

日光東照宮・輪王寺及び周辺の社寺巡り

18. 11. 14～15

齋木 敏夫

12時30分 JR日光駅に19名が集まり、バスに乗り、食事処に向かった。

「明治の館」(登録有形文化財)

日光東照宮の裏手の静かな場所にあり、緑豊かな木々に囲まれて石造りの建物が建っている。周りには紅葉が残っており、快晴の空に映え、下を向くと草や苔むした石、水槽の周りに紅葉が散り、きれいであった。支配人の和智さんが迎えてくれ、建物について説明してくれた。話によると蓄音機を日本に初めて紹介したアメリカの貿易商 F. W. ホーンの別荘として建造された。明治の息吹を今に伝える石造りの3階建て洋館で18世紀にイギリスで流行したジョージアン様式の建物だそうだ。壁全体に稲荷川の日光石(安山岩)を使った乱れ石積で、重厚な造りとなっている。東京大空襲で自宅を失った重光葵(マモル)外務大臣も一時使用しており、1945年ミズリー号での降伏文書調印の全権大使としてこの別荘から向かい、調印したそうだ。金沢城の石垣が戸室石(安山岩)で出来ており、青みがかかったのと赤みがかかったのが微妙に交わっていたのを思い出した。館内はレストランになっており、食事となった。オムライスだが卵焼きがトロっとしており、普段食べているのとは違う美味しさだった。支配人の計らいで食後にチーズケーキとコーヒーを出していただいた。その他 輪王寺境内の三仏堂、常行堂を僧侶が案内していただけるように手配もしていただいたそうだ。

日光山 史跡、世界遺産

古来二つの川が合流する地点は聖地とされ、賀茂川と高野川の合流地点に下鴨神社が創建された。同様に大谷(ダヤ)川と稲荷川の合流地点である聖地に766年勝道上人が四本龍寺を創ったのが輪王寺の始まりだ。この地の一番高い山である男体山は古くから信仰され、二荒山神社が出来、仏教の伝来により観音の霊地である補陀落山として信仰された。補陀落(フダラク)が二荒(フタ)となり、それをニコウと読み、空海が日光に変えたといわれる。その後円仁が三仏堂、法華堂、常行堂を創建、天台宗の寺となった。鎌倉時代には源頼朝も厚く信仰している。江戸時代には天海上人が貫主となり、家康の死後、東照宮が建てられ、ほぼ現在の姿が整えられた。明治以後輪王寺、東照宮、二荒山神社に分かれ、「二社一寺」と称されるようになった。

輪王寺 三仏堂(重文)

和智さんにより紹介された若い僧侶の案内で三仏堂に向かった。お堂の前には国指定の天然記念物で金剛桜といわれる樹齢500年の大きな桜があり、きれいな桜紅葉を見せていた。お堂は修理中だが向かって左の半分程の鉄骨造りの覆いが取れ、きれいな姿を現していた。大きな扁額には篆書体で金堂と書かれていると説明があった。建物は入母屋造、銅瓦葺、一重裳階(モツ)付で垂木は吹き寄せとなっており、日光最大の建造物だ。仏教伝来時代に金色の仏像を金人(コジン)と呼ぶようになり、それ以降 金人が安置されるお堂を金堂(コドウ)と呼ぶようになったようだ。中に入り、天台様式的一段下がった内陣から丈六の阿弥陀如来、右に千手観音、左に馬頭観音三尊像を拝観した。拝観を終え裏側の出口を出ると相輪櫓(ワリノリ) (重文)がある。比叡山西塔の釈迦堂の裏山にある相輪櫓(重文)を模して造られたものだ。その前にある日光山随一の規模の護摩祈願所である護法天堂(重文)を見て、大猷院への参道を歩きながら杉の木立の間に見える紅葉を楽しんだ。

大猷院(タイウイン)

徳川家光の廟所であり、名前は家光が亡くなった時に当時の天皇からいただいた諡号(シヨウリ)の大猷院殿に因んでいる。ここも住職が案内してくれた。にない堂形式の常行堂、法華堂(いずれも重文)を見て切妻造、三間一戸の仁王門(重文)をくぐった。金剛柵の中には阿吽二体の仁王像が安置されている。石段を上ると二天門(重文)がある。入母屋造、三間一戸の楼門形式で日光山内では一番大きい門だそうだ。持国天、広目天の二天を安置している事から二天門と呼ばれている。裏側の左右には雷神像、風神像を安置されている。門の横が展望所になっており、下を見ると石灯籠が沢山並んでいる。10万石以下の大名からの献上品だそうで彼らはそこから廟所を拝んだそうだ。更に石段を上ると袴腰付きの鐘楼と鼓楼(いずれも重文)が有り、その先に切妻造、唐破風付きの夜叉門(重文)がある。牡丹の花が彫刻され、緑、赤、白、紫に彩られた四体の夜叉が前後に祀られており、夜叉は靈廟を護っているそうだ。拝殿(国宝)に上がり、家光公の大きな位牌を拝み、天井に描かれた狩野探幽作の140にも及ぶ龍の絵や襖絵等を見学した。権現造(ゴンゲンゾウクリ)の建物で拝殿、石の間、本殿(いずれも国宝)からなっている。東照宮の派手さに比べて黒漆を使った地味な装飾となっており、家光の家康に対する控えめな姿勢が偲ばれる。

拝観を終え、石段を下り、特別拝観が出来る宝形造の常行堂に入った。常行堂は比叡山延暦寺に始まり、寛永寺と輪王寺にもあったが現在は寛永寺にはない。90日間南無阿弥陀仏と念仏を唱えて堂内を歩く常行三昧(ジョウギョウサンマイ)の行を行う場所だ。堂内を僧が案内してくれた。禅宗様の須弥壇には木造阿弥陀如来及四菩薩坐像(いずれも重文)が安置されている。五智宝冠阿弥陀如来といわれ、阿弥陀如来は宝冠をかぶり、緑色の孔雀の上の蓮華座に安置され、その周りにやや小振りの孔雀に座った金剛法、金剛利、金剛因、金剛語の四菩薩が安置されている。これは天台密教の金剛界曼荼羅の一部の図像から造られたそうだ。案内の僧は「法利因語」の菩薩と説明してくれた。お堂の一角に鳥居と立派なお社があり、阿弥陀如来の守護神と云われる摩多羅神(マタロシ)が祀られている。僧の説明では今迄一度も開扉をされたことがなく、これからも開扉をされる予定がないとのことであった。

見学を終え、バスに乗り、第二いろは坂の「い」から「ね」までの20のカーブの坂道を順調に上った。中禅寺湖を左に見て戦場ヶ原の枯れ草を眺めて進むと湯ノ湖の近くにある「休暇村日光湯元」に着いた。湯ノ湖は白根山からの水と温泉からのお湯が流れ込み、水温と気温の違いから蒸気が出ることから名付けられたのかなと思った。近くにはスキー場やキャンプ場があるようだ。

ホテル「休暇村日光湯元」

部屋に入り、一休みして夕食前に温泉に入った。奈良時代に開湯したといわれる日光湯元温泉の源泉から引いた良質の温泉で泉質はナトリウム・カルシウム・塩化物炭酸水素塩泉、乳白色をしている。源泉掛け流しの温泉で湯元の湯は本来無色透明だが、光や空気に触れることで白濁や緑濁に色を変えていくそうだ。ゆっくりお湯に浸かり、体を温めた。5時45分から1階のレストランで夕食となった。3段のお重に刺身や煮物、鍋に入れる具材が入っており、その他天ぷらや漬物などは自由にとれるようになっていた。栃木県の地酒「天鷹」の冷酒を飲み、楽しい一時であった。夜は空が澄み、満天の星が眺められた。翌朝 朝風呂に入り、再び温泉を楽しんだ。朝食は7時からバイキングスタイル、好きなものをお盆に載せ、いただいた。

8時40分にバスは出発し、二日目の行程が始まった。中禅寺湖をほぼ半周すると寺の駐車場に着いた。

中禅寺

輪王寺の「別院」で坂東の第18番札所の寺だ。バスを降りると山門まで僧が迎えに来てくれた。山門は入母屋造、三間一戸の楼門形式、僧の案内で観音堂に入った。

千手観音立像（重文）は立木観音と呼ばれ、桂の一木造りで像高約6mの大きな像だ。平安初期の作で伏し目がちで柔らかな表情と素朴さが感じられた。脇侍には奥羽征討の時に源頼朝が寄進したと伝わる四天王像が祀られている。明治35年の山津波により、観音堂が湖畔に押し流されたがご本尊は少しの損傷もなく、湖上に浮かび、現在の歌ヶ浜観音堂に安置されたそうだ。廊下伝いに歩き、階段を三階まで登ると五大堂がある。向かって左側に波之利(ハリ)大黒天があり、中央には不動明王を中心にして降三世(ゴウザンゼ)明王、軍荼利(ゲンダリ)明王、大威徳(ダイイタク)明王、金剛夜叉(コンゴウヤ)明王の五大明王が祀られている。降三世はシバ神とその妻を踏みつけ、軍荼利は蛇を身にまといつけ、大威徳は水牛に乗り、金剛夜叉は五眼を有するのが特徴だ。三階からは伽藍の屋根越しに中禅寺湖が見え、その先に男体山が良く見え、遠くには日光白根山も見え、素晴らしい眺めだ。邪鬼が持ち上げている灯籠や袴腰の鐘楼を見て、境内を出た。

バスに戻り、古くからある「いろは坂」を下った。センターラインもなく、この道で対面通行をしていた時代は大変だっただろうと思った。

田母沢御用邸記念公園

園内に入るとピークは過ぎたようだがまだまだ紅葉が鮮やかだ。皇太子時代の明治天皇の静養所として造営されたものだ。銀行家の小林家の別邸に赤坂離宮より旧紀州徳川家江戸中屋敷の一部等を移築して出来ている。昭和19年には今上天皇の幼少時に疎開先ともなった。戦後御用邸は廃止となった。御座所・御食堂・皇后御座所・謁見所など10棟が重文となっている。唐破風の付いた車寄せ(重文)の横から館内に入り、畳の縁を踏まないよう注意して説明版を見、ビデオを見て館内を見学した。円窓から見る庭の景色も素晴らしかった。

日光東照宮

家康の遺言により、死後1年たって遺体が日光に移され、秀忠により東照社が創建された。家光の代になり、その建物は群馬県世良田の東照宮に移築され、現在の建物が造替された。その後宮手を賜り、東照宮と称するようになったが現在は他の東照宮と区別する為日光東照宮とっている。常行堂の横でバスを降り、東照宮に向けて昨日とは逆に参道を歩いた。左に曲がると石段と石鳥居(重文)がある。1618年に黒田長政が奉納したそうだ。石段は上に向かって徐々に狭くなり、遠近法で石鳥居が遠く見えるように造ってある。東照宮境内は平日だが非常に混んでいた。五重塔(重文)は五層部分だけが扇垂木で詰組斗拱(ツグキトキョウ)の禅宗様で造られている。以前に心柱が少し浮いて造られているのを見たのを思い出した。切妻造、三間一戸の表門(重文)の仁王像を見て中に入り、上神庫・中神庫・下神庫の三神庫(重文)を見た。校倉造風で中には「千人武者行列」で使用される馬具や装束類が収められている。切妻造の神厩舎(重文)の猿の彫刻は猿が馬を守る動物だという言い伝えに寄るもので「三猿」が有名であるが8面に猿の一生が刻まれている。御水舎(重文)で手と口を清めた。鼓楼と鐘楼(共に重文)は左右対称になっており、入母屋造、袴腰で勾欄を着けている。陽明門(国宝)は1日中見ても飽きないことから「日暮らしの門」ともいわれている。

入母屋造、銅瓦葺、三間一戸の楼門で四方に唐破風が付いている。修理が終わったばかりで彫り物が色鮮やかとなっている。門をくぐり、振り返って右から2本目の柱を見るとその柱だけグリ紋が逆さまになっている。これは「魔除けの逆柱(サカバシラ)」といわれているそうだ。奥宮に向かう坂下門(重文)は銅瓦葺、平唐門で有名な「眠り猫」(国宝)が墓股の中に彫られている。左甚五郎の作といわれ、裏側には雀が彫られている。安心して猫が眠り、猫を怖がらずに雀が遊んでいるという天下泰平を謳歌しているようだ。家康の眠る奥宮へは行かずに胡粉で白く塗られた四方唐破風の付いた唐門や透塀(スペイ)(共に国宝)の彫刻を見て拝殿(国宝)に入った。石の間の先の本殿にお参りし、説明を聞きながら豪華な内装やそれぞれ違った姿に描かれた格天井の絵を眺めた。拝殿を出ると拝殿、石の間、本殿を囲むように東西透塀があり、花狭間格子という花模様の透かし彫りが入れられた格子がはめこまれている。神輿舎(シヨシヤ)(重文)にある神輿を見て本地堂に行くと混雑しており、3回待って漸く中に入れた。説明を聞き、鳴き龍の音を聞いた。集合時間がせまっており、大急ぎでバスに戻った。

バスは杉並木の道を通り、今市に向かった。杉並木は東照宮への参道に松平正綱が20余年の歳月をかけて紀州から取り寄せた杉の苗木を植えたことに始まるそうだ。

報徳庵

杉並木公園横の駐車所でバスから降りた。お店は古民家を利用した繁盛店で平日でも待っている人がおり、縁側に座って食べている人もいた。我々は予約してあるので奥の四つのテーブルに座り、野菜の天ぷらともりそばをいただいた。蕎麦は手打ち、しっかりとした歯応えで喉越しがよく、天ぷらはサツマイモ、かぼちゃ等がカラット揚がっていて美味しかった。食後公園を散策すると旧江連家という名主屋敷であった大きな古民家が見られた。

食後バスに乗り、宇都宮に向かい、大谷に近づくと大谷石で造った蔵が目立つようになった。

大谷寺(オヤヅ)

縄文時代には岩山の洞穴を住居として利用し、古墳時代には横穴を掘って墓地とした。天平年間には下野薬師寺、国分寺の礎石に使われ、平安時代には日本最古の磨崖仏である大谷観音を凝灰岩の岩窟壁面に彫りだし、天台宗の寺院として信仰の場をつくりだした。江戸時代初めには天海の弟子である伝海が住持となり、家康の娘亀姫の支援を受けるなどして復興された。現在一帯は特別史跡、日本遺産、坂東三十三観音の第19番札所となっている。切妻造、三間一戸の仁王門をくぐり、観音堂に入った。まず大谷石の岩肌に刻まれた4mもある大きな本尊の千手観音像(重文)を拝んだ。平安初期に造られたもので細部は粘土により成形されている。千年以上が経過しているがなかなか見応えがある。その左手に伸びる岩窟には伝釈迦三尊像(重文)、伝薬師三尊像(重文)、伝阿弥陀三尊像(重文)があり、計10体の磨崖仏を拝観できた。お堂を出て庭を散策すると朱色の弁天堂があり、その近くに白い蛇の置物がある。空海が退治した毒蛇が従順な白い蛇となり、弁天様に仕えるようになったと云う伝説に基づくもので頭をなでると御利益があるそうだ。千手観音と如意輪観音の石像を見て宝物館に入り、お堂の下の大谷岩陰遺跡から出土した縄文時代の人骨、土器・石器や懸け仏、鰐口等を見学した。人骨は本堂を修理した際に出土したもので11,000年も前のものだそうだ。

兼学を終え、宇都宮駅で解散となった。お天気に恵まれ、名残りの紅葉も楽しめ、幹事さんの行きと届いた配慮により、素晴らしい旅が経験できた。